

国際発信という役割

井上 順孝

1. 国際会議との因縁

私は 1982 年 4 月に日本文化研究所に講師として着任した。この年は國學院大學創立百周年に当たり、その記念行事の一環として日本文化研究所主催の国際シンポジウムが開催されることが決まっていた。シンポジウムは「アジアの近代化と民族文化」というテーマで 1983 年 1 月に開催された。ロバート・ベラー氏とピーター・バーガー氏がメインゲストで、その他韓国から柳東植氏、インドからトリロキ・マダン氏、インドネシアからアリフィン・ベイ氏、フィリピンからルネ・メンドーザ氏、シンガポールからエディ・クオ氏の各氏を招いた豪華なものであった。当時主事であった藺田稔氏が師と仰いでいた柳川啓一氏の人脈によるところが大きかったと考える。

それから 13 年後の 1996 年 1 月にふたたび大掛かりな国際シンポジウムを開催することになった。「グローバル化と民族文化」がテーマであった。このときは私自身が日本文化研究所の主事であったので組織委員長となったが、所長であった阿部美哉氏と相談しながら、ローランド・ロバートソン氏、リリアン・ボアイエ氏という著名な宗教社会学者を招聘した。当時磯村尚徳氏が日本文化研究所の教授であったので、ジャンヌ・パイフェール氏を紹介いただいた。

この 2 つの国際会議の結果はいずれも日本文化研究所編の単行本として刊行された。それぞれ『アジア文化の再発見—比較国学をめざして—』（弘文堂、1984 年）、『グローバル化と民族文化』（新書館、1997 年）である。

20 世紀においては、國學院大學でこうした国際会議が開かれることはそう頻繁ではなかった。現在と比べていろいろな面でかなりハードルが高かったようだ。それが 21 世紀になり、日本文化研究所から研究開発推進機構への移行前後あたりから、国際会議はむしろ日常的な企画へと転じた。そのきっかけは 2002 年度から 2006 年度まで 21 世紀 COE プログラムに採択された「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」による事業推進である。日本文化研究所はこのプログラムの重要な一翼を担った。日本文化研究所がなければこのプログラムへの応募さえ覚束なかったとさえ言えるだろう。それまでの国際会議の経験とそれによって得られていた国外の研究者たちとの人脈は非常に強力な基盤として機能したのである。

2002 年 4 月から私は新設された神道文化学部へ移籍し、日本文化研究所は兼任教授ということになった。プロジェクトの責任者は継続したが、学部や大学院の学生指導も行うことになったので、なかなか大変であった。けれども、そもそも日本文化研究所着任のときに与えられた役割からしても、國學院大學を中心とする神道や日本文化研究の成果の国際発信や研究交流の推進は自分にとっての責務になってしまったのだと感じていた。

2. COE プログラムでの鍛錬

COE プログラムが採択される上では、とりわけ阪本是丸氏の非常な尽力があったのだが、5年間の事業推進によって國學院大學の国際交流には全体として底力がついたと感じている。このプログラムは3つのグループに分かれて研究を実施したが、日本文化研究所は主に第3グループ(「神道・日本文化の情報発信と現状の研究」)の事業推進に関わった。そして『神道事典』(弘文堂、1999年)の本文を英訳したオンライン事典 EOS (Encyclopedia of Shinto) の作成とともに、神道・日本文化研究をテーマとした国際会議の開催をミニシンポジウムを含めて合計6回行った。

第1回は2003年3月に「各国における神道研究の現状と課題」をテーマに開かれた。招聘したのは、米国のヘレン・ハーデカ氏、フランスのフランソワ・マセ氏、オーストリアのベルンハルト・シャイド氏、オランダのヤン・ファン・ブレーメン氏、韓国の李元範氏。第1回の会議なので、それぞれの国で神道や日本宗教について一線で研究している人たちに依頼した。

第2回は2003年9月に、「〈神道〉はどう翻訳されているか」をテーマに、アン・ウェイマイヤー氏(米)、マーク・マクナリー氏(米)、ジョン・ベンテリー氏(米)、マセ氏、魯成煥氏(韓)を招いた。各国の神道古典についての研究のレベルが予想以上に進んでいることを感じさせられた会議であった。外から神道はどう見えているかを知る上でも、大変興味深いものとなった。この年の12月にはさらにミニ・国際シンポジウム「〈神道〉はどう翻訳されているか(2) 近現代の神道を中心に」を開催し、ジャン・ピエール・ベルトン氏(仏)とインケン・プロール氏(独)を招聘した。年度は違うものの、2003年にはなんと3回も国際会議を開催したことになる。

第3回は、2004年9月に開催され、テーマは「神道の連続と非連続」であった。神道概念の再考を内包するものであった。リュドミーラ・エルマコーワ氏(露)、アルノー・プロトン氏(仏)、ファビオ・ランベッリ氏(伊)、ゲイリー・エバーソール氏(米)、クラウス・アントーニ氏(奥)を招聘した。このときは日本文化研究所の若手研究者に、それぞれ招聘した発表者へのコメント役をしてもらおうという構成にした。こうした機会に直接国外の研究者と意見を交わす体験を増やして欲しいと考えたからである。

第4回は2005年9月に「オンライン時代の神道研究と教育」をテーマに開催された。情報化の進行を意識して、新しい研究方法に着手している研究者を招聘した。色音氏(中)、ステーブン・コベル氏(米)、ペトラ・キーンレ氏(独)、ジャン・ミシェル・ビュテル氏(仏)、ベンテリー氏である。この会議でも若手研究者にそれぞれの発題にコメントしてもらう形式とした。國學院大學関係者だけでなく、学外の若手研究者にもコメント役を依頼した。研究のネットワークは国内外に広がってこそ、いっそう力を発揮するからである。

最後の第5回の会議は2006年9月に、「神道研究の国際的ネットワーク形成」というまさに一連のシンポジウムが目指すそのもののテーマで開催された。招聘したのは、魯成煥氏、色音氏、マーク・テーウェン氏(諾)、ジョン・ブリーン氏(英)、ベンテリー氏である。招聘が複数回になる人が多かったが、これはネットワーク形成の促進を考えてのことである。

3. 研究開発推進機構時代へ

COE プログラムが終了した直後に日本文化研究所を発展させた研究開発推進機構という新しい組織ができる。このことはCOE プログラムが採択された段階で目指されたことであり、降ってわいた話ではない。2007年に研究開発推進機構がスタートすると、日本文化研

究所は同機構の一機関という位置づけになった。日本文化研究所の研究活動を拡大発展させる形で研究開発推進機構になったが、日本文化研究所のそれまでのプロジェクトの一部は日本文化研究所で継続的に実施するという、少しややこしい話ではある。そして国際交流・国際発信に関わる事業は、引き続き日本文化研究所が担当することになった。日本文化研究所には2つのプロジェクトが設けられたが、そのうち「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトが国際交流・国際発信を担うことになった。

機構ができたのはたんに組織改革だけの問題ではなかった。学術メディアセンターという新しい研究棟が建設された。2006年に日本文化研究所のあった常磐松2号館は解体された。同時に常磐松1号館、3号館も解体され、その場所に学術メディアセンターが設置された。この「学術メディアセンター（略称 AMC）」という名称は私が考案したものである。「外国語名はどれも・・・」というような思いがけない異論が、当時の安蘇谷正彦学長から出されたものの、大方の了解が得られて決定した。1階には国際会議場を設置するというになっていたが、是非同時通訳用のブースを設け、聴衆席は傾斜をつける形式にして欲しいと希望を出した。他の部分はともかく、国際会議場だけは使いやすいものにしたと強く願っていたので、要望通りになったのは、大変うれしかった。これが常磐松ホールである。

2008年10月に学術メディアセンターの開所式が行われた。そして常磐松ホールで行われた初めての国際会議が、同年10月26日の国際研究フォーラム「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」であった。それまで重ねてきた神道・日本文化に関する国際会議を基盤に、当時から本格化した宗教文化教育の拠点作りの一環ともなるものであった。このときはアラン・カミングス氏(英)、ミカエル・ヴァチュツカ氏(独)、ビュテル氏を招聘した。

以後、日本文化研究所では毎年国際フォーラムを開催するようになった。2009年には「映画の中の宗教文化」をテーマにビュテル氏、ジョリオン・トーマス氏(米)、グレゴリー・ワトキンス氏(米)を招聘した。宗教文化教育の教材の一つとして映画を位置づけたときに、どのような可能性、利用の方法があるかを議論した。宗教文化教育の教材として映画・DVDを積極的に利用するという方針を固めた。個人的には2007年に平凡社から毎年刊行されていた『宗教と現代がわかる本』で、毎回宗教文化に関わりが深い最新の映画を紹介していたので、非常に得られるところが多かった。

2010年10月には「イスラームと向かい合う日本社会」をテーマにし、イサム・ハムザ氏(埃)、サリー・ユセル氏(豪)、グリット・クインカマー氏(独)を招聘した。日本各地にモスクが建設されるようになり、イスラーム問題は日本でもしだいに大きな問題となってきたことを意識しての企画であった。

2011年10月には「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」をテーマにし、エリカ・バッフェリ氏(伊)、カミング氏を招聘した。それまでは国際フォーラムに当たってずっと司会を務めてきたが、この年は黒崎浩行氏とノルマン・ヘイヴンズ氏に司会役をお願いした。

2012年9月には「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」をテーマにロベルタ・ストリッポリ氏(米)、マーク・マックウィリアム氏(米)を招聘した。宗教文化教育の教材としての文学、絵画、漫画・アニメといったものに焦点を当てた。

2013年には通常の国際フォーラムを開催しなかったが、これには事情がある。この年は

日本宗教学会の第72回学術大会が國學院大學を会場に開催された。当時私は同学会の会長であったが、学術大会の実行委員長でもあった。そこで開催校企画として日本文化研究所国際フォーラムと日本宗教学会の公開学術講演会との共催という形で、9月に講演会を実施したのである。「ネットワークする宗教研究」というテーマのもとに、国際比較神話学会会長でハーバード大学教授のマイケル・ヴィツェル氏に講演者の一人になってもらった。なおこの講演会をもとにしたものが、井上順孝編『21世紀の宗教研究—脳科学・進化生物学と宗教学の接点—』（平凡社、2014年）である。ただし、この年度は2014年2月に「日常生活と宗教文化—戒律をめぐる問題を中心に—」をテーマとした比較的小規模な国際会議を開き、英国のジュリア・イブグレイブ氏に、英国の宗教教育についての基調講演をしてもらった。

2014年9月には再び例年の形式の国際フォーラムを開催した。「ミュージアムで学ぶ宗教文化—デジタル時代のチャレンジ—」というテーマで、カミングス氏、サミュエル・C・モース氏（米）を招聘した。カミングス氏はロンドン大学が大英博物館の近くにあるので、博物館を授業にどう取り入れるかを説明した。モース氏はボストン美術館の例をひきながら、宗教的芸術を博物館で扱うことの意味について掘り下げた議論を提示した。この年から國學院大學博物館を充実させていくことに機構全体で取り組むことになったので、それも意識した企画であった。

そして昨2015年10月に日本文化研究所設立60周年を記念する「『日本文化』研究の展望」が開催され、米国からウィリアム・ケリー氏とスチュワート・ガスリー氏が招聘された。日本文化研究所における研究の回顧ではなく、これからの展望に焦点を当てることにしての企画である。この会議と前日の公開講演会をもとに刊行されたのが、國學院大學日本文化研究所編『〈日本文化〉はどこにあるか』（春秋社、2016年）である。

むすび

神道や日本文化の研究を日本人だけが行っては、どうしても見方が偏ってしまう。そこに含まれているものの大半を、つい当然のこととして考えがちであるからである。当たり前の中の中にこそ多くの不思議が潜んでいる。日常世界のあり方が異なる人の眼から見た方が、その不思議さを発見しやすいと言える。お互いの文化について意見交換する醍醐味の一つはここにある。21世紀にはいり、日本文化研究所が研究開発推進機構の一機関としての機能を充実させていく上で、こうして継続されている国際的交流の場は、10年20年たつてから、その本当の意義が明らかになるのではないかと考えている。

それにしても、常磐松ホールという非常に優れた設備を持つ会場で、こうした意義深い国際会議を行えるということは、恵まれていると感じる。せっかくの施設をさらに有効に使って欲しいと願う。

最後に付け加えておきたいのは、ここで紹介した多くの国際フォーラムが、実は衛星放送としてテレビ放映されているということである。それらはDVDとして残されているので、いずれ、非常に貴重なアーカイブとなると考えている。これもまた10年後、20年後にその価値が見いだされるのであろうと思っている。

これらの国際会議を撮影し、スカイパーフェクTV！で放映することにご尽力いただいているのが、元・精神文化映像社社長の並川汎氏である。数時間の会議を一時間にまとめるとするのは部外者では難しいので、そのタイムシートは私が作成しているのだが、撮影から放映に至るまでの並川氏の厚い支援というのは、本当にありがたく感じている。